

## 《鍼經》《靈樞》史略<sup>1</sup>

眞柳 誠 (茨城大學大学院人文科学研究科)

**提要：**現在の《靈樞》に至る歴史を調査・検討した。この結果、原本は東漢の約2世紀前後に編纂された《九卷》であり、西晉3世紀後期から《鍼經》の書名が出現している。隋の6世紀末に《黄帝鍼經》となり、當系統の唐政府校定本が651年に始まる醫官教育に採用されただろう。唐政府本は當時の韓國と日本でも採用された。北宋政府には不全な1巻本しか傳承されなかったが、高麗政府から《黄帝鍼經》9巻が獻本され、元祐8年(1093)に刊行している。しかし舊法派の王欽臣が東夷から得た書と認知されていた理由で、以後の新法派時代は重印できなかった。このため唐代からの古傳本を偽装した《靈樞經》9巻が、元祐本等に基づき1118年前に作成されていた。南宋では政府藏書に偽經《靈樞經》しかなかったため、元祐本系の《黄帝鍼經》9巻を史崧が献上した。そこで王繼先は西漢時代の「黄帝内經」を再現する目的で、史崧本を《黄帝内經靈樞》24巻に改變し、熙寧本《素問》24巻と共に國子監で紹興25年(1155)に合刻した。當合刻で「黄帝内經」=《素問》《鍼經(靈樞)》とする「傳説」に書名と實體の根據が與えられ、後世の「通説」に至った。當時は金と對峙していた理由もあり、繼先は高麗獻本・元祐本に由來する全證據を紹興本で削除している。彼が1161年に彈劾・追放されたため、以後の南宋重印本《素問》《靈樞》等は紹興本に関する記載を削除した。以上の経緯があり、現在まで高麗獻本と現《靈樞》の關係に誤解や混亂が繼續していたのである。本検討により現《靈樞》は民間の傳承を經由せず、唐政府本まで直接遡ることが判明した。東漢時代の舊態を保持している可能性もあった。中國醫學古典の傳承史では極めて異例であり、《靈樞》の稀有な特徴として認識されねばならない。

### 1 序論

本書9巻81篇の成書経緯と年代は《素問》同様に確證がない。兩書各9巻が西漢の前1世紀《七略》(《漢書》藝文志)の「黄帝内經十八卷」という安易な類推は、《甲乙經》序(4世紀後半)が初出だろう。《素問》王冰次注本24巻も稀に《甲乙經》を引用し、王冰序(762)は「漢書藝文志曰、黄帝内經十八卷、素問即其經之九卷也、兼靈樞九卷、迺其數焉」と云う。當説も《甲乙經》序に基づくことは新校正注(1069)が指摘する。これ等の影響で《素問》に「黄帝」、更に「黄帝内經」まで冠せられ、遂に傳説が通説となった。全く同様の書

---

1 本稿は以下の拙報の概要である。「《靈樞》の歴史(1)」《漢方の臨床》59巻12號2223-2244頁、2012。「同上(2)」同上60巻1號189-194頁、2013。「同上(3)」同上60巻2號377-387頁、2013。「同上(4)」同上60巻3號547-556頁、2013。

名變化が《靈樞》にもある。

兩書の成立年代についても眞摯な議論が現代まで重ねられてきた。丸山は兩書を比較検討し、原《素問》は東漢初期(1世紀前半)、原《靈樞》は東漢中期(2世紀前後)に編纂されたと考證<sup>2</sup>する。現在のところ最も妥当な見解だろう。無論、兩書が先秦からの基礎文獻群に基づき編纂されたことも疑いない。

例えば馬王堆3號漢墓より1973年に出土した帛書の《足臂十一脈灸經》及び《陰陽十一脈灸經》は秦漢間の書寫で、内容は《靈樞》經脈篇の前段階だった。後世出現した《靈樞》偽書説は、この1例から明らかに否定できる。但し《足臂十一脈灸經》などは灸法の論だったが、《靈樞》經脈篇で鍼法の論に改變されていた<sup>3</sup>。更に經脈篇以前の第1-9篇の篇名下には「九鍼十二原第一[法天]」の如く、法天・法地・法人・法時・法音・法律・法星・法風・法野が小字で記され、總目も同様に作る。これは九鍼論第78篇にある「九鍼者、天地之大數也、始於一而終於九。故曰、一以法天、二以法地、……、八以法風、九以法野」、及び以下に續く九鍼の説明と對應する<sup>4</sup>。

すると九鍼を中心に論述する第1-9篇こそ原《靈樞》81篇を編纂する際に使用された先行論文集で、《素問》《靈樞》に言及がみえる《九鍼》九篇や《鍼經》ではなかろうか。しかし、まだ謎が多く、かくも單純な經緯ではなかろう。ともあれ本書は一人一代の作ではなく、幾段階かを経て2世紀前後までに祖本が編纂されたのは問題ない。

他方、本書自体の傳承史にも未詳部分が多く、内容研究の障壁となっている。中でも北宋で高麗獻本を刊行したと記録される《黃帝鍼經》9卷と、現《黃帝內經靈樞》24卷の關係は推測に止まっており、史實に基づく系統解明が一切なされていない。高麗本の様相も知られておらず、その來歴を唐代の書だろうと推測するだけだった。則ち高麗獻本と北宋刊本の實態こそが障壁の核心であり、これ等を解明できるなら、宋以前と以後の軌跡も浮かび上がって來るだろう。當問題意識に基づき、以下は時系列に沿って《靈樞》の歴史に光を當ててみたい。

## 2 宋代までの傳承

本書は編纂當初から9卷本だったようで、3世紀初の《傷寒論》序は「九卷」と記す。

2 丸山昌朗《鍼灸醫學と古典の研究》262-275頁、大阪・創元社、1977。

3 武田時昌「灸經から鍼經へ—黎明期の中國醫學とその史的展開」、田中淡編《中國技術史の研究》555-598頁、京都大學人文科學研究所、1998。

4 猪飼祥夫「中國醫學史稿⑬黃帝內經の成立」《鍼灸 OSAKA》12卷1號80-88頁、1996。

西晉3世紀後期の《脈經》卷3は「鍼經」、4世紀後半の《甲乙經》序は「鍼經九卷」と記載し、《鍼經》の書名が徐々に定着する。隋の6世紀末で初めて「黄帝」を冠した《黄帝鍼經》<sup>5</sup>となり、當系統が唐の永徽醫疾令(651)<sup>6</sup>で初めて鍼生の必習書・考試書に指定されると、奈良時代や新羅時代<sup>7</sup>の律令制度でも採用された。唐醫疾令で指定された諸書が政府機關の校定を経ていたことも疑いない。《太素》楊上善注(約675)と《外台秘要方》(752)が引く「九卷」や、《素問》王冰注(762)が引く「靈樞經」「鍼經」の佚文には、現《靈樞》と近似した内容が見える。楊上善注が引用する《九卷》佚文は現《靈樞》と篇名まで一致していた。

しかし唐宋間の戦亂で《鍼經》等の傳承が途絶えたらしい。唐令を部分的に踏襲した北宋の天聖令(1029)は《黄帝鍼經》を鍼學(鍼生)の必習書としたが、考試書に規定しなかった<sup>8</sup>からである。北宋政府の《崇文總目》(1041)でも「黄帝鍼經一卷」<sup>9</sup>という零本だった。校正醫書局が最初に編刊した《嘉祐本草》の詔勅(1057)では、今後の校刊豫定書に「靈樞・太素・甲乙經・素問之類」<sup>10</sup>を挙げるが、「靈樞・太素」は不全なため未刊だった。但し宋初の《太平御覽》(983)卷397に長文の《黄帝鍼經》が引用<sup>11</sup>されており、現《靈樞》淫邪發夢第43の全篇とほぼ同文である。

### 3 北宋・元祐本《黄帝鍼經》

北宋後期の元祐年間は舊法派の政權だった。この時、高麗派遣から帰國した王欽臣が秘書省の副長官に任命され<sup>12</sup>、恐らく彼の提案で政府が所蔵しない亡佚書の《所求書目錄》を秘書省が作成し、1091年に高麗使節へ授與している<sup>13</sup>。その中に「黄帝鍼經九卷」が記載されていた。1092年11月、高麗國進奉使の黄宗愨と副使の柳伸<sup>14</sup>が多数の宋亡佚書を

5 魏徵等《隋書》1040頁、北京・中華書局、1973。

6 丸山裕美子「日唐醫疾令の復元と比較」《日本古代の醫療制度》1-40頁、東京・名著刊行會、1998。

7 三木榮《[補訂]朝鮮醫學史及疾病史》13-15頁、堺・三木榮、1963。

8 丸山裕美子「北宋醫疾令による唐日醫疾令の復原試案」《愛知縣立大學日本文化學部論集》第1號(歴史文化學科編)21-40頁、2010。

9 錢東垣《崇文總目輯釋》、許逸民等《中國歷代書目叢刊》第1輯上127頁、北京・現代出版社、1987。

10 艾晟《經史證類大觀本草》(影印柯逢時本)582頁、東京・廣川書店、1970。

11 李昉等《太平御覽》、《四部叢刊三編》影印宋本1964頁、台北・台灣商務印書館、1980。因みに《太平御覽》が多く依據する唐代624年の《藝文類聚》(付索引、上海古籍出版社、1982)に當佚文はない。

12 脱脱等《宋史》9814-16頁、北京・中華書局、1977。

13 鄭麟趾等《高麗史》卷10(150頁)、東京・國書刊行會、1908。

14 《續資治通鑑長編》(李燾撰、卷478・11393頁、北京・中華書局、1985)に「(元祐七年[1092]十一月)甲申(五日)、高麗國進奉使・通議大夫・兵部尚書黄宗愨、副使・中大夫・尚書工部侍郎柳伸入見」とある。

獻本し、秘書省が同年12月から謄寫校正<sup>15</sup>していた。元祐8年(1093)1月、秘書省長官の任に在った王欽臣は、高麗獻本で唯一完本だったらしい《黃帝鍼經》の刊行を上進し<sup>16</sup>、詔勅に依り秘書省で校對・詳定し、尚書工部で彫板、國子監から同年に印刷施行<sup>17</sup>された。なお欽臣の父の王洙(997-1057)は《崇文總目》の編纂中に張仲景《金匱玉函要略方》を發見し、本書に基づき現《金匱要略》が再編・輯佚・校刊(1066)された事は、林億等の「校正金匱要略方序(新編金匱方論序)」から解る。

現《靈樞》の一部經文下にある「一作」等の割注は、秘書省の校對結果らしい。當然、政府刊行物なので、王欽臣の序跋や秘書省・國子監の列銜・牒文、每卷頭の銜名も付加されただろう。しかし經文まで改變する所謂「校定」はしなかったらしい。これが元祐本《黃帝鍼經》9卷である。

哲宗が新法派の宰相・章惇等に依る親政を始めた1094年、舊法派の王欽臣も左遷された。次の徽宗時代も新法派の宰相・蔡京が舊法派を彈圧し、そのまま北宋末期に至った。すると舊法派の王欽臣が主導した元祐本は1093年の印刷施行が唯一で、恐らく以後は重印されなかっただろう。北宋首都・開封の國子監で保管されていたはずの元祐本版木が、靖康の變で金軍に略奪されたのも疑いない。

私の調査により、北宋末期から南宋初期及び金・蒙古代の醫書に「(黃帝)鍼經」の引用が多數見出された。これ等の佚文は現《靈樞》とほぼ對應する。9卷毎に1-9の篇次とする特徴は、李東垣の弟子・羅天益が編纂した《東垣試效方》(1266)所引の「黃帝鍼經」佚文から判明した。その篇名・篇順まで現《靈樞》と同じだった。

#### 4 北宋・偽經《黃帝靈樞經》

一方、《黃帝鍼經》に類似した別書の《黃帝靈樞經》9卷が徽宗の時代から出現している。

---

15 《宋會要輯稿》職官18之12-13(徐松輯、北京・中華書局影印本2746-47頁、1957)にこうある。「(元祐七年十二月)十九日、秘書省言。高麗國近日進獻書冊、訪聞多是異本、館閣所無、乞暫賜頒降、付本省立限謄本。乞即時進納元本、別裝寫秘閣黃本書收藏。詔降付秘書省、仍令本省謄寫校正二本送中書省・尚書省、及別謄寫校正二本送太清樓・天章閣收藏」。

16 ①脫脫等《宋史》335頁、北京・中華書局、1977。②徐松輯《宋會要輯稿》崇儒5之27(2246頁)、北京・中華書局、1957。③王應麟等《玉海》卷63天聖鍼經(1197頁)、江蘇古籍出版社・上海書店、1987。④李燾《續資治通鑑長編》卷480(11425-26頁)、北京・中華書局、1985。

17 《宋朝事實類苑》(江少虞撰、397-398頁、上海古籍出版社、1981)にこうある。「哲宗時、臣寮言。竊見高麗獻到書、內有黃帝鍼經九卷。據素問序稱、漢書藝文志黃帝內經十八篇。素問與此書各九卷、乃合本數。此書久經兵火、亡失幾盡、偶存於東夷。今此來獻、篇秩具存、不可不宣布海內、使學者誦習。伏望朝廷詳酌、下尚書工部、雕刻印板、送國子監依例摹印施行。所貴濟衆之功、溥及天下。有旨、令秘書省選奏通曉醫書官三兩員校對、及令本省詳定訖、依所申施行」。

朱肱《重校證活人書》(1118)等に始まり、蒙古時代の王好古・李東垣の著作まで引用されていた。各引用文を検討したところ、多くは現《靈樞》と對應するが、一部は《素問》王冰注所引「靈樞經」との對應度が高い不可思議な現象を認めた。南宋政府の《中興館閣書目》(1177)も「黃帝靈樞經九卷、黃帝鍼經九卷」<sup>18</sup>の2書を著録する。北宋の《崇文總目》で「黃帝鍼經一卷」の不全本が、南宋で「黃帝鍼經九卷」の完本となったのは、元祐本の刊行で理解できる。だが何故、別名の「黃帝靈樞經九卷」が出現したのだろうか。

當《靈樞經》に就いて南宋の《郡齋讀書志》(1151)は、「靈樞經九卷……。或謂、好事者於皇甫謐所集內經・倉公論中抄出之、名爲古書也。未知孰是」<sup>19</sup>と記し、好事家が輯佚して古籍と稱した可能性を疑う。異なる情報が南宋・王應麟(1223-96)の《玉海》にあり、《中興館閣書目》著録書をこう説明していた<sup>20</sup>。

(中興館閣)書目、黃帝靈樞經九卷、黃帝・岐伯・雷公・少俞・伯高答問之語。隋楊上善序、凡八十一篇。鍼經九卷大氏同、亦八十一篇。鍼經以九鍼十二原爲首、靈樞以精氣爲首。又間有詳略。

《玉海》の著録でも「黃帝靈樞經九卷」と「鍼經九卷」は別書だった。「九鍼十二原爲首」と謂う當時の《鍼經》は、「九鍼十二原」が第1篇の現《靈樞》と合致する。則ち現《靈樞》の祖本は疑いなく當時の《鍼經》で、高麗本に基づく元祐本の系統と確證できる。

一方、當時の《黃帝靈樞經》9卷81篇を「精氣爲首」と記述するが、現《靈樞》に「精氣」篇はない。《素問》や王冰注・新校正注にも同篇名は見えない。但し《甲乙經》の明・藍格抄本(東京・靜嘉堂文庫藏)だけは首篇を「精氣五臟第一」と題し、明・醫統正脈本等の「精神五藏論第一」と異なる。私の検討に據ると、《甲乙經》の醫統正脈本は北宋の再校刊本(1088)系統、藍格抄本は徽宗時代の再再校刊本(1103-14)系統だった。《郡齋讀書志》の「靈樞經九卷……。或謂、好事者於皇甫謐所集內經・倉公論中抄出之」からしても、當時の《黃帝靈樞經》は再再校刊本《甲乙經》と關係するだろう。また《玉海》が謂う「黃帝靈樞經九卷、黃帝・岐伯・雷公・少俞・伯高答問之語」「又間有詳略」の特徴は、北宋-蒙古の諸書に引用された「靈樞經」と書名下に付く「經」まで一致する。

《玉海》は更に「隋楊上善序」を記録するが、現《靈樞》には楊上善序も痕跡も一切ない。なお《太素》の楊上善注は「九卷(經)」を引用し、その佚文は現《靈樞》と同一或い

18 趙士煒《中興館閣書目輯考》、許逸民等《中國歷代書目叢刊》第1輯上432頁、北京・現代出版社、1987。

19 晁公武《郡齋讀書志》、許逸民等《中國歷代書目叢刊》第1輯下1108頁、北京・現代出版社、1987。

20 王應麟等《玉海》卷63、江蘇古籍出版社・上海書店影印本1190頁、1987。

は對應する。但し「靈樞」「精氣」や類似した文獻名・篇名は、《太素》と楊上善注<sup>21</sup>及び《日本國見在書目錄》や新舊兩《唐志》が著録する楊上善の著述に見えない。《靈樞經》に存在した楊上善序は偽作を疑うべきだろう。

因みに北宋・政和7年(1117)11月の建言で秘書省藏書の《秘書總目》が編纂され、これを底本に「南宋秘書省の藏書」と「搜索・獻上を求める闕書」の双方を著録した《秘書省續編到四庫闕書目》(1145)が再編纂<sup>22</sup>されている。當《四庫闕書目》は「寶應靈樞九卷(存)。天寶靈樞內經九卷 闕」<sup>23</sup>を著録するので、兩書は1118年頃の北宋秘書省に所藏されていたが、杭州に逃れた1145年の南宋秘書省は前書のみ保有していた。前書に冠する「寶應」は、《素問》王冰序の唐・寶應元年(762)と符合する。南宋の1145年に闕書だった後書に冠する「天寶」(742-756)は寶應より稍前である。皆、王冰との關係を示唆する年代なので、「王冰が使用した唐代の《靈樞經》九卷」を暗喩する書名が與えられている。「古書」を偽裝する作爲的冠稱と判斷して問題ない。當書を「靈樞(經)」と命名したのも、《素問》王冰序の「靈樞九卷」と王注所引「靈樞經」に依據しただろう。

以上からすると、實際は「好事者於“王冰所注素問、中抄出之”により元祐本を加工し、《甲乙經》も參照して再編したのが《[寶應]靈樞(經)》9卷だったと推定できる。當本に楊上善序まで偽作して「名爲古書」とし、高麗本や元祐本より正統な「王冰時代からの中國古傳書」を詐稱したのだった。元祐本が舊法派の出版だったために利用できず、その來歴も前掲の《宋朝事實類苑》がいう「偶存於東夷」だったからだろう。《直齋書錄解題》神仙類に著録の荒唐無稽な「靈樞金鏡神景內經十卷 稱扁鵲注」<sup>24</sup>等から類推すると、《[寶應]靈樞經》の作者は道教に心酔した徽宗周邊の道士だろう。或いは徽宗から政和6年(1116)に「通眞達靈先生」の號を賜り、道學で「校籍」して門徒に授經していた林靈素(1076-1120)<sup>25</sup>の高弟が作成したのではなかろうか。本書の著録は《宋史》が最後だった。後述する紹興本《靈樞》の出現により偽經と看破され、遂に上梓されずに亡佚したのだろう。

## 5 南宋・紹興本《黃帝內經靈樞》

21 篠原孝市・山邊浩子「《黃帝內經太素》楊上善注所引書名人名索引」、《東洋醫學善本叢書八》133-134頁、大阪・東洋醫學研究會、1981。

22 會谷佳光「《秘書省續編到四庫闕書》の成書と改定」《東方學》106輯66-80頁、2003。

23 《宋秘書省續編到四庫闕書目》卷2第82葉、許逸民等《中國歷代書目叢刊》第1輯上341-346頁、北京・現代出版社、1987。

24 陳振孫《直齋書錄解題》347頁、上海古籍出版社、1987。

25 脫脫等《宋史》13528-530頁、北京・中華書局、1977。

南宋初期の《秘書省續編到四庫闕書目》は偽經の《[寶應]靈樞》9巻だけを著録していた。他方、現《靈樞》の史崧序から判断すると、彼が家藏の《靈樞》9巻を24巻に改編して南宋政府に献上し、紹興25年(1155)に國子監から刊行されたことになる。史崧の献上した《靈樞》が秘書省藏《[寶應]靈樞》と同一書なら、史崧本を國子監が出版したのは不可解となる。私の調査結果でも《[寶應]靈樞》系の佚文と史崧本に由來する現《靈樞》には相違があった。ところが南宋政府は1161年の《通志》藝文略<sup>26</sup>も1177年の《中興館閣書目》も、一致して「黃帝鍼經九卷」「(黃帝內經)靈樞經九卷」の兩書を著録する。ならば南宋政府は1161年以前に《黃帝鍼經》9巻を收藏していた。これぞ紹興本を序刊した1155年の直前に史崧が献上した書で、且つ元祐本系の《黃帝鍼經》9巻だったことを證明しよう。史崧が《鍼經》を献上すると書けなかった理由もある。彼の序が言及する「名醫」、則ち南宋初代皇帝・高宗の侍醫・王繼先(1098-1181)<sup>27</sup>と門下の太醫局醫官は、史崧の獻本で《素問》との合刻を着想した。就いては王冰序の「黃帝內經」を再現する目的で、《素問》24巻と合刻する《鍼經》9巻を《靈樞》24巻に改名・改編したのである。

繼先らは熙寧本《補注黃帝內經素問》(1069)を覆刻し、《靈樞》との合刻を意味する「重廣」を冠して《重廣補注黃帝內經素問》とした。《黃帝鍼經》も《黃帝內經靈樞》に改稱したが、更に「內經」=「素問靈樞經」の意圖があった。そこで合刻により「黃帝內經集注」となった含意で、紹興本《靈樞》巻2には「黃帝素問靈樞經集注」と題したらしい。《靈樞》を「黃帝內經」の一部とする王冰説に當段階で「書名上の根據」が付與され、現《靈樞》が誕生したのである。私の検討によると、史崧序が每巻末に付加したと記す音釋に繼先らの關與はなく、字音や校異の注に秘書省の助力が少し見えた程度だった。史崧序が謂う校正も不徹底で、經文自体はほぼ元祐本のままだったと推定できる。

當時の南宋は王繼先と義兄弟だった宰相の秦檜が金と屈辱的な「紹興和議」(1142-61)を締結しており、秦檜に左遷された和議反對者には「華夷思想」が抬頭していた。この状況下の出版では、《宋朝事實類苑》に「偶存於東夷」と記述された《黃帝鍼經》に由來する證據一切を隱蔽しなければならない。繼先らは當理由で書名・卷數の改變のみならず、元祐本が底本と判明する王欽臣の序跋や北宋の列銜・牒文、每巻頭の名銜を削除したらしい。同時に書頭に24巻の總目を付加し、每巻頭にあったはずの篇目まで削除した。しかも王

26 岡西爲人《宋以前醫籍考》32・208頁所引、台北・古亭書屋、1969。

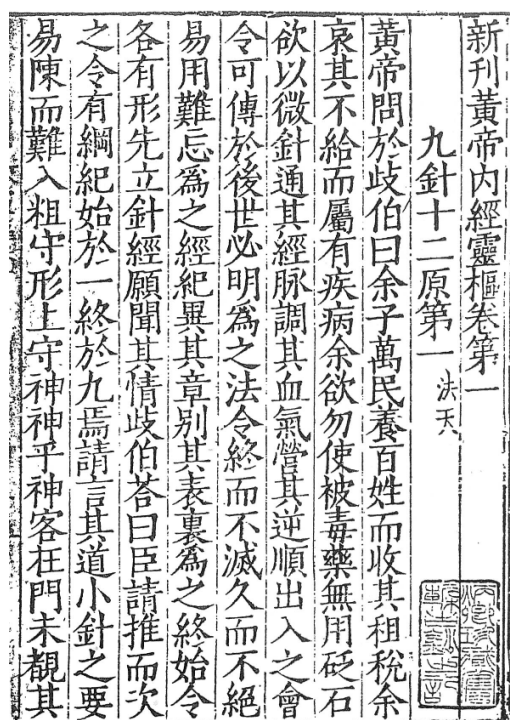
27 ①脱脱等《宋史》13686-13688頁、北京・中華書局、1977。②方春陽《中國歷代名醫碑傳集》165-171頁、北京・人民衛生出版社、2009。

繼先が數多の悪行で1161年に彈劾・追放されたため、以後南宋の重印や再版では繼先らの序跋・列銜等が削除された。南宋の藏書目も紹興本《素問》《靈樞》を默殺して一切著録せず、刊行に秘書省と國子監が關與した記録も史書から抹消した。故に紹興本の存在と實態が闇に隠れ、今日まで《靈樞》の來歴に混亂と誤解が続いてきたのである。

## 6 現《靈樞》の諸本

明・無名氏本《靈樞》

(東京・日本經絡學會、1992)



現《靈樞》の諸本には史崧序があり、紹興本を祖とするのは疑いない。現存最古版は元の古林書堂本で、24巻を12巻に再編し、巻末の音釋を篇末に移動している。明代には古林書堂本に基づく諸本が出版され、それらが現中國でも諸書の底本とされている。日本では江戸前中期に《類經》から再編された9巻本も流行した。江戸末期には森立之等《經籍訪古志》が明・無名氏「仿宋」24巻本を最善本として著録し、當本は1987年以來、幾度か影印出版されている。

私が古林書堂本と無名氏本を比較・検討したところ、兩本は親子關係にない一方、元版でしか發生し得ない共通の特徴を見出した。則ち兩本は兄弟關係にあり、共に紹興本系未詳元版の翻刻となる。なら

ば明の嘉靖後期に「仿宋版を偽裝」して刻版されたのが無名氏本だった。とはいえ無名氏本の俗字・誤字は古林書堂本より少なく、善本性が高い。その他の明清版・朝鮮版・和刻版もあるが、大多數は古林書堂本からの派生につき割愛したい。

## 7 總括

《鍼經》と《靈樞》の歴史を現存する諸版まで検討した。

原本は約2世紀前後に編纂の《九卷》で、3世紀後期から《鍼經》の書名が出現している。隋の6世紀末に《黃帝鍼經》と「黃帝」が冠せられ、當系統の唐政府校定本が651年に始まる醫官教育に採用されただろう。唐政府本は當時の韓國と日本でも採用された。北宋政府には不全な1巻本しか傳承されなかったが、高麗政府から《黃帝鍼經》9巻が獻本



され、元祐8年(1093)に刊行していた。しかし舊法派の王欽臣が東夷から得た書と認知されていた理由で、以後の新法派時代は重印できなかった。このため唐代からの古傳本を偽装した《靈樞經》9巻が、元祐本等に基づき1118年前に作成されていた。

南宋では政府藏書に偽經《靈樞經》しかなかったが、元祐本系の《黃帝鍼經》9巻を史

《素問》《靈樞》関連の書名・巻數著録年表

前1C	七略	黃帝內經 18巻・外經 37巻
3C 前期	仲景序	素問 (8巻?)、九巻
3C 後期	脈經	素問、鍼經 (九巻)
4C 後半	甲乙經序	素問 9巻 + 鍼經 9巻 = 黃帝內經 18巻
500 前後	全元起本	黃帝素問 8巻
6C 末	隋志	黃帝鍼經 9巻
651	永徽令	素問、黃帝鍼經
762	王冰序	次注本 24巻 (素問 9巻 + 靈樞 9巻 = 黃帝內經 18巻)
1069	熙寧本	[補注] 黃帝內經素問 24巻
1085?	元豐本	[補注釋文] 黃帝內經素問 24巻
1093	元祐本	黃帝鍼經 9巻
1118 前	偽經	黃帝靈樞經 9巻
1121	宣和本	[補注釋文] 黃帝內經素問 24巻
1155	紹興本	[重廣補注] 黃帝內經素問 24巻 + 黃帝內經靈樞 24巻 (= 黃帝內經)

崧が献上した。そこで皇帝侍醫の王繼先は王冰の言に従い、西漢時代の「黃帝內經」を再現する目的で史崧本を《黃帝內經靈樞》24巻に改變し、熙寧本に基づく《黃帝內經素問》24巻と共に紹興25年(1155)に合刻した。當段階で《靈樞》にも「內經」が冠せられ、更に紹興本の系統が《素問》《靈樞》の善本として明以降から認知され、現代に至った。同時に前1世紀の「黃帝內經」=《素問》+

《鍼經(靈樞)》とする、《甲乙經》序・王冰序の「傳説」に書名と實體の根據が與えられ、後世の「通説」に至ったのだった。以上と拙報「《素問》版本概要」に基づき、兩書の書名・巻數の變化を整理したのが上掲年表である。

他方、現《靈樞》は明・無名氏本→未詳元版→紹興本→元祐本→高麗・新羅本→唐政府本まで、ほぼ直線的に遡る歴史があることを解明できた。この千數百年の傳承において、高麗獻本・王欽臣・史崧・王繼先および元明版の行爲一つでも缺落するなら、疑いなく本書は亡佚していた。奇跡的とはこの事だろう。

祖本の唐政府本は初唐の651年以前に校定され、それが民間の傳寫による内容改變をおよそ經由せず、現代まで傳承されてきた。唐政府本以前らしき《九巻》の佚文も現《靈樞》と篇名まで一致していた。これも中國醫學古典では例外で、正に好運と謂うしかない。

無論、唐政府や歴代の各本でも些か「校定」され、文脈の變化や訛字も必ず發生している。しかしながら《鍼經》と《靈樞》が受けた校定は《素問》《傷寒論》などより遙かに輕微だった。これ故、唐代或いは唐以前の舊態を相當に保持するだろうと推測できる。稀有な事だが、《靈樞》の貴重な特徴と認識しなければならない。若し第1-9篇の篇名下に付記された「法天-法野」がその一つならば、極めて初期の段階の痕跡と言えよう。